

# Eureka IX

六年制通信 No.15 令和3年9月1日(水)号

## 二学期が始まる

川沿いを散歩していると日に日に蟬の声が変わっていきます。私は小さいころからツクツクボウシの声が嫌いです。あの声を、夏休みの終わりを告げる音として、ですから子供心に悲しい響きとして受け取ってしまったのです。それがこの歳になっても続いているわけです。考えてみれば小学校に入学して以来半世紀以上、宿題を出される側から出す側に変っただけで、ずっと夏休みのある生活をしてきました。しかし、この期間を有効に使ったと満足したことは、ほんの数回しかないと思います。毎回勉強及び読書計画を完璧に(何度も自画自賛しながら)立てるのですが、自分の意志の弱さを考慮に入れ忘れるので、必ず挫折して二学期を迎える、その繰り返し。反省。反省。これも毎回同じ反省をしている…。

さて、いつの間にか三重県にも緊急事態宣言が発令されました。コロナ禍は一向に終息しませんね。ウイルスが変異し、若い子たちにも感染が広がっているようです。そんな中、学校が始まります。いっそのまま夏休みを延長するのか、授業は行方が全部リモートとするのか(君たち毎日6時間iPadの画面を観て勉強できますか?)、分散登校か、いやいや多分大丈夫だから普通に授業をしますか、ワイドショーでは実に喧しいことです。何が正しいのか、恐らく誰にもわからないのでしょうかね。

昨年は誰も経験したことのない休校スタートでした。三重県はその時感染者0。今の方が圧倒的に感染が広がっています。それでも学校が始まります。昨年はいきなりの宣言で困惑しましたが、あれから一年以上、私たちは何を学んだのでしょうか。私は学校という場所の大切さを再認識しました。学校は必要ない、リモートで授業すれば十分だという「文化人」の方たちがテレビに多数出ていました。しかし、君たちの反応は真逆でした。休校が解除された後は、嬉しそうに登校していました。理屈ではなく肌で学校を必要としているのです。勉強は一人でできる、確かにそうかもしれませんが。司馬遼太郎は図書館があれば学校は必要ないと言いました。そういう面もあるかもしれませんが。しかし、仲間と勉強することで一人では達することのできない領域に行ける、そういう面もあるのです。大切なのは「視野に入っている仲間」がいることです。画面の中ではなく、です。教室にいと君の視野に友だちや先生が入るでしょう。これが大事なのです。普通私たちは視野の中のものに影響を受けるからです。視野から外れると、それは自分の関心からも逸れていきます。英語では **Out of sight, out of mind.** (「去る者は日に疎し」と訳されますが、本当は「視野の外にあるものは意識の外にある」という意味です)。ですから、なるべく学校でみんなと一緒に勉強する

ことが大切です。それができるよう、つまり、学校で感染しないよう、私たちは適切な行動を取らなくてはなりません。何度も言いますが、私は教育を受けた者にはそれにふさわしい言動があると信じています。あれはダメ、これもダメ、そんなふうに誰かに言われなくても、自分で考えて行動できるはずです。マスクの着用、手指の消毒、黙食など普通に考えればできることです。いいですか、よく考えなさい。考えて行動しなさい。ただし、自分の基準を周りに押しつけてはいけません。自分の基準から判断して首をかしげる行動している人がいれば、ちゃんと話せばいいのです。きっと通じます。

昨年は一か月以上授業がなくて、世間では「勉強が遅れる、どうするのだ」と大騒ぎでした。君たちも覚えているでしょう。しかし何も心配することはない、ちゃんと追いつく、この事も昨年私たちが学んだことですよね。ですから今回も、たとえ授業数が少なくなったとしても、大丈夫です。学校に来られない期間があったとしても、家で勉強していればいいだけです。教科書も単語帳もあるのでから。

さて、最後に厳しく言うておきます。感染者が出たとしても特定しようとしたり、ましてや誹謗中傷するなど、絶対にしてはなりません。県下の児童生徒に陽性者が出ると、さあ学校はどこだと探し回る噂好きの馬鹿が必ずいますが、ああいうのは教育を受けてこなかったのでしょうね。嫌いやわ。しかも、あの手のバカは熱心なんですね。よく「勤勉は馬鹿の埋め合わせにはならない」と言います。バカだからせめて一生懸命に…、という一見なるほどそうだ頑張れと応援したくなりますが、世の中に何が迷惑かと言って、勤勉なバカほどはた迷惑なものはない。これ、北杜夫の言葉です。

### 今週のおすすめ

・大倉崇裕 『ゾウに魅かれた容疑者』 (講談社)

この夏はたくさん読めましたか。猛暑は間違いなかったと思いますが、途中から梅雨かと勘違いするほどの長雨でした。晴耕雨読、雨の日は読書に親しむ、昔からそうなっているのですね。私はこの夏はいつも以上に勉強もできたし本も読めました。そして、別に夏休みが終わっても読書も勉強も続けていかななくてはいけないと、改めて感じています。日々、新しい発見があったり考え方に変化が生じたり、そういう自分の心をじっと見つめるのは面白いですよ。

さて、紹介する本は警視庁いきもの係シリーズの最新作。おなじみの須藤・薄コンビに加え魔女と呼ばれる福家警部補と死神こと儀藤警部補も登場します。ですから、この本はシリーズの初めから読んでみないと、笑うツボが作者の意図と異なってしまうかも。シリーズは全て図書館に入れてありますから『小鳥…』からどうぞ。

動物に対する知識と愛情が異常ともいえる薄巡查、人間と動物の優先順位が明らかに私たちとは違います。それゆえ人間の言葉がちょっと苦手。言い間違いのオンパレード。須藤警部補がそれを正しながら会話が進むのですが、このシリーズを読んでいなくて初めて『ゾウ…』を読んだら、ひょっとしたら二人の会話がうっとうしく感じるかもしれません。ですから、まずは『小鳥…』をどうぞ。

BGMは 齊藤和義 の 歩いて帰ろうでした…。